

コロナ禍での修学旅行

感染症対策 功を奏す



空高く立ちそびえる姫路城

11月17日〜20日に修学旅行が挙行された。新型コロナウイルス感染症（以下、コロナ）が流行する中であったが、一人一人が感染に注意し、各々の目的のために、2年生が西日本各地を巡った。

初日には、山口県の錦帯橋や広島県宮島の弥山、厳島神社などをクラス毎に回った。2日目の午前には、広島市の平和記念公園を訪れ、原爆の被害を実感するとともに、平和を祈念した。午後には、姫路城や神戸でのクルージングを楽しんだ。3日目は、班別研修で京都などを巡り、各々の課題研究を進めた。最終日には、クラス別に京都や滋賀の名所を巡り、有意義な3泊4日の旅になった。今年コロナ禍のため、修学旅行を延期や中止、行き先を変更した学校が県内には多数ある。けれども、高崎高校は、当初の



翠巒
Mini Press
第170号
2020/12/21

編集・発行
高崎高校新聞部

日程と方面を変えずに実施した。修学旅行担当である井田郁浩先生は、「コロナが絡んでいるため、感染対策が大きくなっていった。学校と旅行会社、宿泊先などの打ち合わせを念入りに行ない、1部屋あたりの宿泊人数の変更を検討し、実施した。結団式や解団式を行わず、流れ解散とするにしたのも感染対策の観点からだ」と口にした。

加えて、「先手、先手の対応が功を奏したと思う。休校明けの段階から高崎は、修学旅行を実施するという方向で全てを進めてきた。感染状況の確認や、保護者の方が不安に思うことなどを事前に検討した。行き先から大阪を外したのもそのためだ。しかし、保護者の方の反対意見が少なかつたことが、修学旅行実施の最も大きな足掛かりになったと思う」と話した。

また、修学旅行実行委員会委員長の井田晴一朗くん（2の2）は修学旅行を振り返り、「自分たちの記憶に残る良い思い出になったと思う。食事中に友人との会話を我慢できなかった人もいたが、全体的に感染対策を意識しながら4日間過ごせた。これからの時期は3年生0学期でもある。今回の楽しかったことや学んだことなどを糧にし、受験に向けて気持ちを切り替えてほしい」と語った。（茂木）

11月19・20日に、1年生は1泊2日で東北において科学リテラシー研修を行なった。今年コロナの影響で東北大学が研修先から外れ、代わりに福島県の4つの施設でクラスごとの研修が行なわれた。また、マスク着用や各所での消毒の徹底など、感染予防に細心の注意を払った。

1学年主任の井上貴智先生は、東北大学の代わりとなる研修先の選定理由について、「福島県には原子力事故のあった第一原発がある。そのため、県を挙げて再生可能エネルギー



仙台の街を見守る伊達政宗像

11月10日に第72回校内マラソン大会が開催された。クラス対抗では、1位が1の1、2位が2の2、3位が1の7であった。個人対抗では、1位が榎本慧くん（2の3）、2位が児玉大空くん（2の2）、3位が野口魁斗くん（2の5）であった。そこで、クラス対抗を制した1の1の委員長柴田大雅くんと個人対抗を制した榎本慧くん取材を行なった。

〈榎本くん〉

「個人対抗で一位になった感想は、昨年のマラソン大会では、7位で非常に悔しい思いをした。1位になったことは素直にうれしい。マラソン大会の1週間前に行なわれた山岳部の大会では、自分が思っていたような結果が残せなかった。悔しさをばねに強い意気込みでマラソン大会に臨めた。

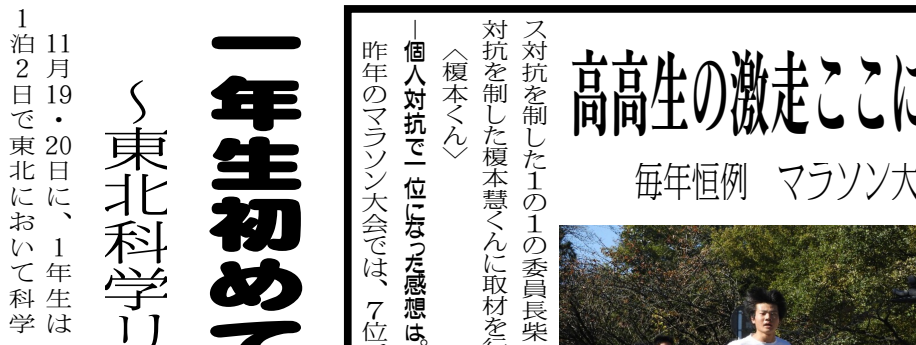
―普段から取り組んでいた練習は、山岳部の練習もかねて、8kgのリュックを背負いながら、後半コースを走り、その後約10分間体幹のトレーニングに1年間ほど取り組んだ。

〈柴田くん〉

―クラス対抗で一位になった感想は、当日、クラスで1位候補の人が休んでしまい、個人対抗で50番以内に入った人が一人しかいなかった。とても驚いた。みんなが本番だけでなく、体育の授業でもさばらずに、しっかり走った結果だと思っ。

―マラソン大会に向けて頑張ってきた、よかったです。

大会前日の夜にクラスラインでクラスTシャツを着て走るという案がでたので、当日ほとんどの人がクラスTシャツを着てきた。そのおかげで疲れた時にも、同じクラスの人を見つけるとなんとか力を振り絞り、走りぬくことできたと思う。（石井）



一年生初めての宿泊学習

〜東北科学リテラシー研修〜

また、「まずは健康に行って帰ってくるのが大切だ。その中で、各所の見学において科学リテラシーについて感じたことを活かしてほしい。赤城合宿がなくなってしまう1年生にとってはこれが初めての宿泊行事となるので、一体感を高めてもらいたい」と生徒に求めた。

研修後に山下遼くん（1の6）は、「研修で最も印象深かったのは、被災地見学だ。10メートル近く埋め立てられた被災地からは、復興の兆しを確認することができた」と話した。また、「語り部の方のお話からは、津波が人々の営みに大きな影響を与え、その記憶が深く刻み込まれていることが分かった。この経験を忘れないようにしたい」と研修を振り返った。（根岸）

大坂なおみ選手が2度目の全米オープン制覇を成し遂げた。大会中彼女のプレーと同じくらい注目を集めていたのは試合後に彼女が身に着けるマスクであった。そこには、人種差別への抗議のため殺害された黒人系の人の名前がプリントされていた。今、世界ではこうした「ポリティカル・コレクトネス」、通称「ポリコレ」が注目されている。▼「ポリコレ」とは性別、人種などによる差別や偏見を防ぐ目的で政治的、社会的な表現を行うことを言う。人種差別マイノリティへの偏見や性別間格差を廃絶しようという高まりにより、近年注目されるようになったが、日本ではあまり見られない▼「ポリコレ」を意識しないことを批判する人もいる一方で、過度に扱うことになりすぎている人もある▼ニューヨーク市では、進化論を支持しない人に配慮して「恐竜」、親が離婚した人に配慮して「離婚」の使用を禁止しており、このような語句は50語にも及ぶ。「メリクリスマス」は「ポリコレ」的観点ではキリスト教徒以外への配慮として使用を控えるべきだそう。実際に、ある世論調査ではアメリカ国民の52%がポリコレ疲れを感じているという▼差別や偏見を無くすことは推進されるべきであるが、それを意識しすぎれば「ポリコレ」は抗議から悪質なクレーム、ひいては表現を制約するものへと姿を変えてしまう。「ポリコレ」と表現や思考の自由の対立に注目が集まっている。（小池）

紙面割表・中澤 裏・鈴木

NOTE

ビブリオバトル県大会開催

吉野君惜しくも入賞逃す

11月7日、群馬県立図書館で全国高等学校ビブリオバトル2020群馬大会が開催された。パトラーたちが、自ら持ち寄った本への愛を観客に伝えるべく、熱弁を振るった。本校からは吉野貴人くん(1の1)が出場したが、惜しくも入賞を逃した。

吉野くんは「自分のいい所をディスカッションで出すことができた。しかし、学校規模でビブリオバトルに取り組んでいるパトラーたちは手強かった」と感想を語った。

本大会を担当した、県立図書館地域協力係の正田さんによると、新型コロナウイルス感染症対策には留意したという。

「席の間隔を空けたり、サーキュレーターで換気をしたりした。また、発表の時に仕切りのアクリル板をつけ、マイク等を発表ごとに消毒した」と話した。また、大会全

体について「今年から高校生にボランティアをしてもらった。よく働いて、楽しんでもらえて良かった。パトラーが集まって、楽しんでくれて、笑顔で終われて良かった」と感想を述べた。さらに、ビブリオバトルの魅力について、「もし高校生ならば、同じ世代の人がどんな本を読み、どう思ったかを知ることが出来る。大人としても、今の高校生の感覚を知ることができて面白い」と語った。

なお、本大会のダイジェスト動画は、群馬県公式YouTubeチャンネル Tube Channel Tuiunosuで公開される予定である。(小松)



毅然と発表する吉野君

情報技術の進歩により急速に普及したSNSは、世界規模の意見交換を可能にし、これまで交わることのなかった価値観を混生させた。当初はグローバルな環境下での異なる

表現の自由と豊かな世界を守る

昨今では、SNSを媒体とした誹謗中傷や風刺画などの攻撃的な表現が社会問題となり、そのような攻撃を受けないために自分の意見の表出を拒む人も現れてきている。

そこで改めて表現の自由というものについて考えてみると、この問題の原因は、SNSの特性がもたらした人々の繋がり方のグローバル化に伴う、社会構造の変化があるのではないだろうか。

近代以前は、似た価値観をもつローカルな集団の中で表現の共有がなされており、表現に対する意見に大きな差異が生じなかった。しかし、

価値観の理解が期待されたSNSだが、その匿名性と強力な伝播性によって、誹謗中傷などの排他的な言動を促進することになった。

こうした状況を改善してい

『ミルク色に見えた流れ』

藤生先生が語る執筆活動



自身の作品と写る藤生先生

本校国語科職員藤生揚亮先生が、小説『ミルク色に見えた流れ』(文芸社)を執筆していたことを皆さんはご存知だろうか。今回はこの本について取材を行なった。

「この本を書いた理由は、小説を読むのが好きで、自分も制作に関わりたかったからである。また、小説を読むという、現実から離れて言葉で想像する体験を読者にも味わってほしかったからだ。」

「制作期間はどれくらいか。」

物語を考えるのは1か月もかからず、2か月ほどでこの本を書き上げた。思い立ったらすぐに作業し、周りのことは気にかけないほど没頭した。本の制作について、費用は200万円ほどを要した。この本を発売するにあたり、出版社にはお世話になった。自分では気付かないミスや校正してくれたり、本の表紙の絵をいくつも用意してくれたりした。

「周囲からの反応は。」

作品中の男女の恋愛描写へ

2つ伝えたいことがある。1つ目は自分の心の支えとなる言葉を見つけてほしいということだ。作中でも主人公の女性はある言葉を支えにして夢を叶えた。読者にもそのようなフレーズを探してほしい。2つ目は身の周りの何気ないものも実は大切かもしれないということだ。本の中で主人公はある男性からの好意を軽んじていた。しかし、その男性への恋心に気付いたときには彼は主人公の妹と結婚し、主人公にはなす術がなかったことが描かれている。だから、周囲のありふれたことも大事にしてほしい。

「今後の執筆活動は。」

出版社の収益に貢献しないと出版できず、自分は今の状況ではない。よって、2回目の刊行は考えていない。ただ、この作品名をサイト名にしたHP上で毎週小説の連載をしている。興味のある人はぜひ覗いてほしい。(五十嵐)

図書館の絵画と高高の縁



塚本とほるさんの絵

図書館にあるバラの絵を知っているだろうか。図書館の西側に飾ってあるこの絵は本校のOBから寄贈されたものだ。そのことについて、加藤聡校長先生と事務長の浅岡守さんに話を聞いた。

絵画の寄贈理由について加藤校長先生は、「同じ78期生の中里龍生さんから寄贈された。」と語った。

絵画の作者について浅岡事務長は「塚本とほるという方が書いた絵画だ。塚本さんは、昔、本校で美術を教えていた先生であり本校とは縁がある。また、作品は本校に咲いているバラを描いたものという話もあり、何かと高高と縁がある絵画だと思う」と語った。(鈴木)

この自由が豊かな生活を送るための権利であるという認識の所持が大切だ。したがって、他者を害する過度な表現をしてはならないのだ。

このままでは、表現に対する制限が増え、人々は表現の自由の権利を失ってしまう。そうなれば、絵画や文学、音楽などの自由な表現が人々の精神や人生を豊かにするという本来の働きもなくなってしまうだろう。似たもの同士の社会に逆行りしてしまう前に、表現者とその受け手とが前記の留意点を意識し、表現の自由を守り抜くことが求められる。(矢野)